

狩猟サミット報告

～立ち上がる若手ハンターたち～

長野県林業大学校 2年 ○高津 勇佑^{こうず ゆうすけ}

要旨

一般的に狩猟に対する社会認識は薄く、ニュースで取り上げられることが多いのは猟銃を使った犯罪や誤解を与える有害駆除報道です。狩猟者は「森の番人」という側面があるにも関わらず、「普通ではない人」というレッテルが張られています。しかし、一部の若い人達には意外に狩猟に対する関心が高まっています。今、狩猟界でいったい何が起きようとしているのでしょうか？全国初の狩猟サミットに参加し、その内容、今後の動向、課題について報告します。

はじめに

私は学生ハンターです。私は野生鳥獣の保全、森林生態系の維持、獣害対策の重要性を感じ、第一種銃猟とわな猟の狩猟免許を取得しました。現在では猟銃を所持し、木曽の猟友会に所属しています。（写真－1）

ハンターになったきっかけは、知り合いの林業家の方や集落の方がハンターだったので自然に狩猟に興味を持ちました。また、全国で野生鳥獣の農林水産被害が増加し、ハンターの高齢化と減少が問題になっている事を知ったのでハンターになる決意をしました。最近の狩猟活動では、猟友会のイノシシ猟やクマ猟に参加し、猟友会の方から狩猟技術を学んでいます。また、休日は単独でヤマドリ猟やワナの点検、修理を行いながら山を歩いています。



写真－1 クマ猟 搬出手伝い

1 狩猟サミット概要

こうした状況の中、昨年10月下旬に岐阜県郡上八幡市で、若手狩猟者を中心とした「第一回狩猟サミット」が二泊三日の日程で開催されました。（写真－2）主催は同市で狩猟を通じて里山保全活動をしている若手猟師のNPO団体「メタセコイアの森の仲間たち」です。同NPOの猪鹿庁事業の一環として企画されました。また、岐阜県、郡上市、大日本猟友会が後援として協働していました。狩猟サミットの参加者は幅広く、ハンター、学生、研究者、



写真－2 狩猟サミット会場

行政、農林家、興味のある一般の方など全国から200人弱が参加しました。参加者の平均年齢は35歳で、参加者の三分の一はなんと女性でした。サミットは分科会方式を採り、15の分科会が企画されました。三日間の食事はジビエが振舞われ、イノシシの丸焼きが目を引きました。(写真-3)



写真-3 イノシシの丸焼き

2 参加目的

私が狩猟サミットに参加した目的は、全国から集まる狩猟者の狩猟観、狩猟を始める動機を知る為、狩猟文化の継承、有害鳥獣対策のあり方を議論する為でしたが、狩猟に関心のある人との交流も目的として参加しました。

3 分科会について

私が参加した三つの分科会について簡単に紹介します。

分科会①は「シカの解体」でした。(写真-4) この分科会ではシカを「いかに衛生的に解体するか」を実演で講義していました。私は猟友会方式の解体方法しか知らなかったの、いい勉強になりました。

分科会②は「ソーシャルビジネスとしての獣害対策と狩猟」でした。(写真-5) この分科会では、獣害対策を生業としているNPOの方の分科会でした。議論のテーマは「獣害対策のあり方」です。「獣害はヒューマンエラーである」、「獣害対策は狩猟ではない」ということが議論されていました。獣害はヒトが知らないうちに招いていることや捕獲重視の獣害対策では効果が薄いことを指摘していました。今後は捕獲を含めた地域住民一体での守りの獣害対策を目指していく必要があると思いました。

分科会③は「何のために捕獲する?～殺生を嫌う国での捕獲の形～」でした。議論のテーマは「捕獲のあり方」です。捕獲には目的と意義を持つ必要があります。狩猟、有害駆除、個体数調整の使い分けを明



写真-4 シカの解体実演



写真-5 分科会②の様子

確にするべきではないかと指摘していました。確かに今の鳥獣行政、ハンターはこの使い分けが明確でなく、捕獲の目的が曖昧になってきているように思いました。

4 今後の狩猟界の動向

ここからは狩猟サミットで提言されたことを踏まえ、私の考えも含めて説明したいと思います。

狩猟界は変革の時期に来ていると感じています。特に若手の女性を中心に狩猟に対する関心が高まりつつあると感じました。北海道では女性狩猟者ネットワークが結成され、「狩りガール」も誕生しているそうです。また「食」から狩猟を始める人も増えてきている感じがしました。(写真-6) また、獣肉以外の利用が活発になってきていることから、今後新たな商品開発に繋がっていきそうです。分科会②でも紹介しましたが、鳥獣管理の専門的な知識を持つ人たちが事業体を立ち上げています。今後、猟友会以外の捕獲団体の多様化が進み、猟友会一本の有害駆除体制にも影響が出るのではないかと思います。



写真-6 鶏の解体体験

5 新人ハンターの壁

「新人ハンターの壁」とは、文字通り新人のハンターがまず直面する困難のことです。新人ハンターの壁で一番大きいのは狩猟費用の負担です。狩猟税、猟友会会費、装備品など初期投資に数十万円かかります。維持費の負担も大変です。射撃訓練のため射撃場に通うのですが100発撃てば約1万円はかかりますし、ワナも消耗品なので安くはありません。ワナはワイヤー部分のみ手作りして経費を抑えていますが、1セット約六千円はします。また、狩猟技術はすぐに身につくものではないので、最初の一頭が自力ではなかなか獲れません。猟友会の方も高齢の方が多くなっているため、狩猟技術自体が消滅しつつあります。

さらに捕獲した獲物ですが、売り先が無いので狩猟費用の負担増加に繋がっています。ジビエに力が入っている地域では販路が確保されているようですが、私の住んでいる木曾地域では食肉処理施設すらない状況です。こうした状況の中、経費は高い、狩猟技術は身につかない、売り先は無いで新人ハンターにとっては厳しい状況です。獣害で苦しむ地域のために狩猟を始めたわけですが、生活を削ってまで猟銃の維持はできないと思っています。

6 鳥獣行政への提案

以上の事から鳥獣行政に新人ハンター研修の導入を提案します。鳥獣行政は新人ハンターの確保に重点を置いていますが、今後は数よりも質を高める必要があります。狩猟技術は地域により違いはあ

りますが、基本的な捕獲技術と衛生的な解体技術は研修で取得できるようにする必要があると思います。また、ハンターの資格認定制度を導入することにより、鳥獣管理に精通したハンター（プロハンター）を養成する必要があると思います。一般のハンターは捕獲した鳥獣の科学的データをとる術を持たず、また重要視していません。こうしたデータの蓄積は地域の野生鳥獣の個体群管理に役立つばかりか、有害駆除の根拠の一つとなり社会に狩猟の公共性を訴えることができる材料になります。このため具体的な野生鳥獣のデータを社会に還元し提示することで、ハンターへの偏見もなくなると考えます。

最後に、今回の狩猟サミットは狩猟に関わる様々な方の議論の場と情報発信の場になっていました。行政の方の参加は少なかったですが、このような取り組みに行政の方も支援・協働をお願いしたいと思います。

7 おわりに

実は中部森林技術交流発表会の前日に、初めてイノシシを仕留めることができました。狩猟歴2年目にして初めての獲物になりましたが、地道に山に通い続け山を少し知ることができたから捕獲できたと思います（写真-7）。



写真-7 初めて捕獲したイノシシ

参考文献

- 狩猟サミット資料
- 岐阜大 野生動物管理学研究センター 特定研究補佐員 森元氏 資料
- 狩猟の文化 ドイツ語圏を中心として 野島利彰
- 野生動物管理学のための狩猟学 梶 光一 伊吾田宏正 鈴木正嗣